

(曾於郡志布志町夏井字土光)

位置と環境

本遺跡は町の中心部から東に約4kmのところ、陣岳山塊の南方向に細長く延びる台地上に立地している。山麓の中程をJR日南線が横断し、線路北側の標高約50mの台地上一帯である。

調査の経緯

発掘調査は志布志リゾート開発事業のゴルフ場建設に伴い奈良不動産株式会社により調査依頼を受けた。そこで、志布志町教育委員会を主体とする夏井土光遺跡発掘調査会により平成3年(西暦1991年)に発掘調査が実施された。

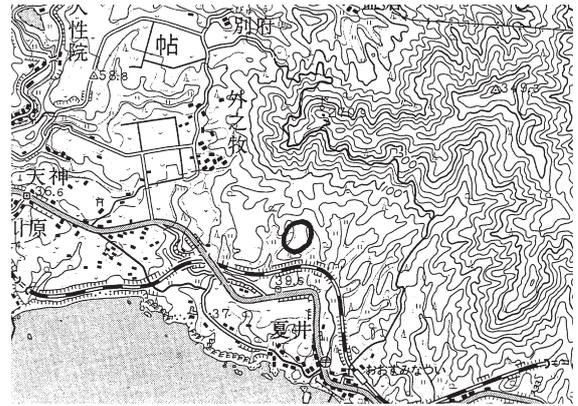
遺構と遺物

調査の結果、縄文時代早期・晩期、弥生時代前期などの遺構や遺物が検出された。

縄文時代早期の遺構は、竪穴住居跡3軒、配石遺構2基、集石遺構28基(第2図)等が検出された。

竪穴住居跡は3軒が検出されている。その特徴から2種類の住居跡が存在することが判明している。

そのひとつは、竪穴をもたない平地式住居跡(第

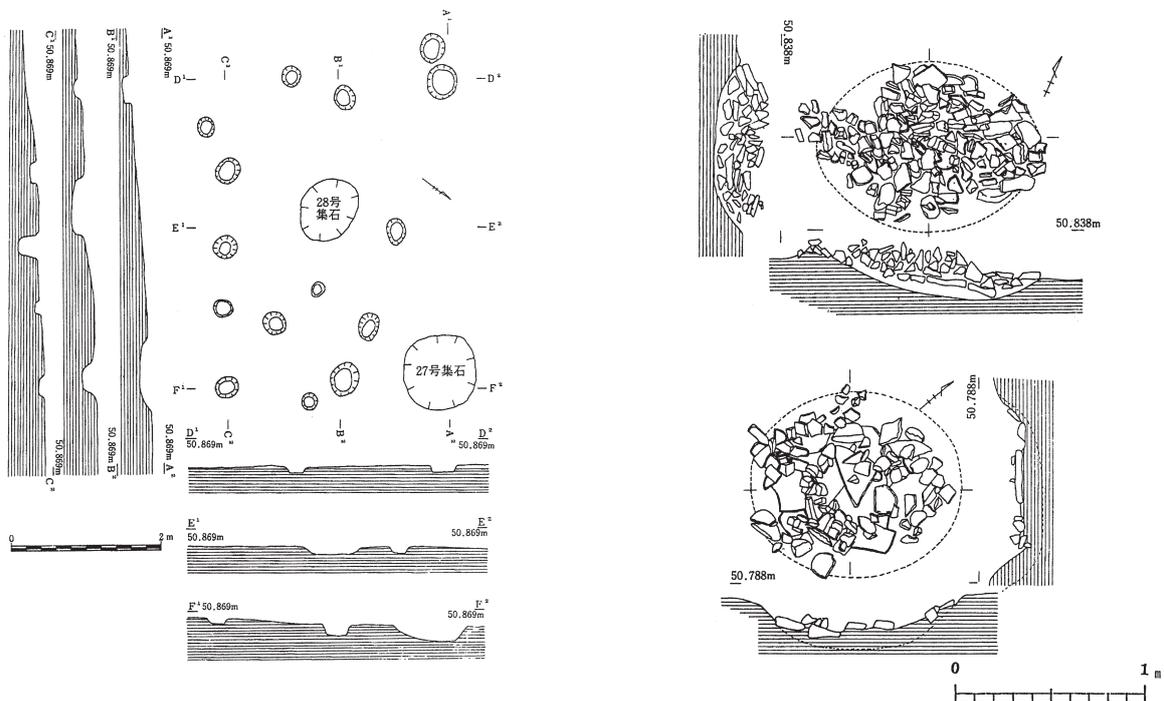


第1図 夏井土光遺跡の位置

2図)で、遺構内の中央部に焼けた集石をもつものである。もうひとつは、斜面を利用して構築されている竪穴住居跡である。

縄文時代早期の遺物は、石坂式(第3図1)・前平式・吉田式・塞ノ神式・押型文(第3図2)などの土器、剥片石器・石鏃・局部磨製石斧・石錘・穿孔具(第3図3・4)・槌石・敲石・磨石・研石等の石器が出土した。

穿孔具は、直接的な穿孔するのではなく、すでに穿孔されている部分を、さらに大きくする道具であることが想起されるものである。



第2図 検出遺構

縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物は、黒川式・夜臼式（第3図6・7）等の土器、抉入片刃磨製石斧（第3図8）・磨製石斧・打製石斧・ノミ形状石器・槌石・穿孔具（第3図9・10）・軽石加工品・磨石・石錘・敲石・台石・石鏃等の石器が出土した。

抉入片刃磨製石斧は弥生時代前半期と考えられ、南九州では類例が少なく珍しい資料である。

また、縄文時代晩期の遺構は、2か所で溝状遺構2条が検出された。

溝状遺構の埋土からは、タケ類、キビ属植物（野草とともに、アワ、ヒエ、キビ等の雑穀類も含む）、イネのプラント・オパールなどが検出された。

全体にタケ類のプラント・オパールが多く検出されたことから、当時の環境が樹林帯であったことが想像された。

また、遺跡の立地条件などを考慮して、キビ属植物、イネのプラント・オパールなどが検出されたことからみて、焼畑を含む畑作系譜の農耕が営まれた

可能性が指摘された。

特徴

溝状遺構からキビ属植物・イネのプラント・オパールなどが検出され、焼畑を含む畑作系譜の農耕が営まれた可能性があることが指摘された。

南九州では類例の少ない、穿孔具や抉入片刃磨製石斧が出土したことは貴重な資料提供となった。

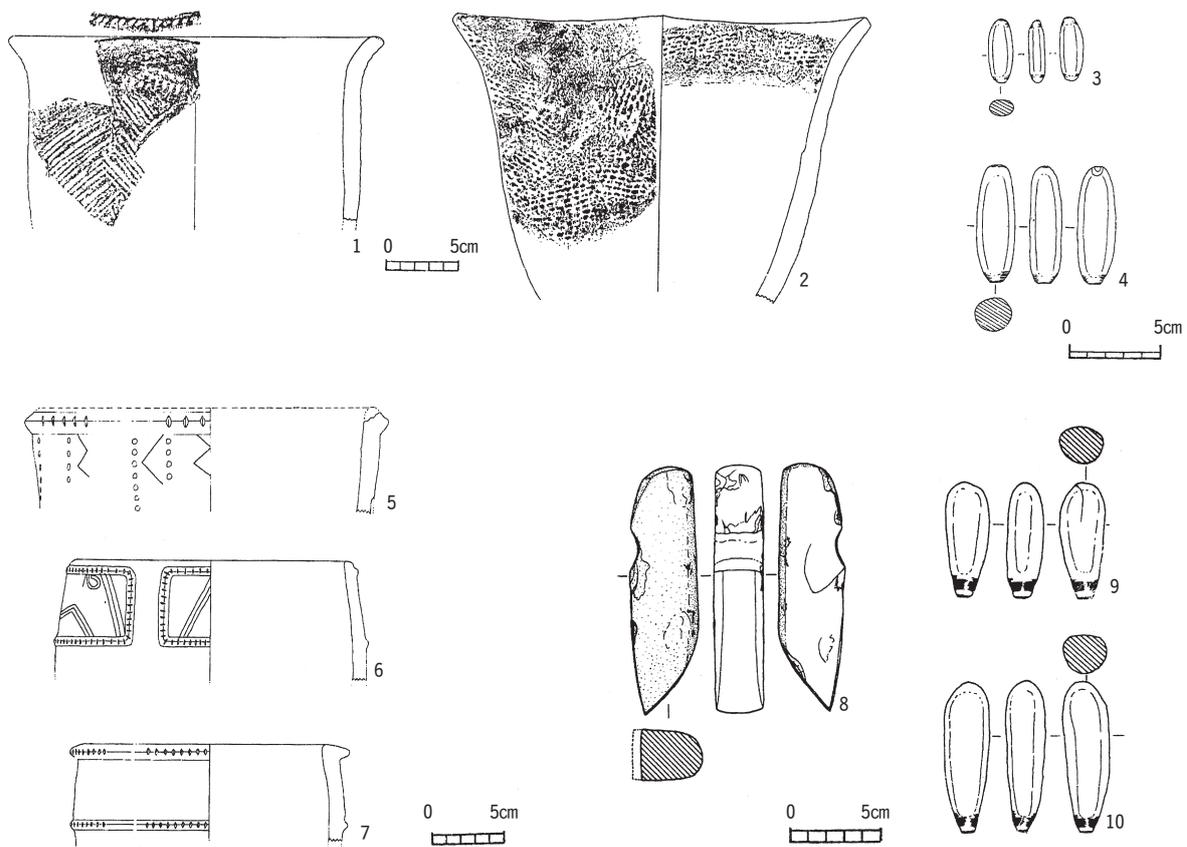
資料の所在

出土遺物は、志布志町教育委員会に保管されている。

参考文献

志布志町教育委員会1991「夏井土光遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』21

(小村美義)



第3図 出土遺物